

# 若者の意識と実態からみる高齢者の社会参加と生きがい

高 間 由美子・杉 原 利 治\*

## I はじめに

人生90年時代を迎え、この長い生涯を高齢者ひとりひとりができる限り健康で、しかも生きがいのある人生を送ることが望ましい。生きがいを高めるためには老若男女を問わず社会参加ができる環境整備が必要である。それが高齢者の自己実現にもなり、真の共生社会の到来ともなる。

前報<sup>1)</sup>では、高齢者の意識調査を通して社会参加に対する活動の実態を調査し、参加内容、高齢者の参加理由、望ましい参加のあり方を探り、社会参加の現状と今後の問題点を明らかにした。その結果、高齢者は学習・社会活動・モノづくりなどを指導・伝授できる指導者としての担い手に成り得ることが明らかになった。しかも、高齢者は指導者としての「力」を100%発揮できること、高齢者自身もそれを望んでいることがわかった。つまり、高齢者は自分の経験や能力を役立てたいと考えていた。

そこで、本研究ではそれらの「力」を発揮する「場」として、あるいは「頼られている」と感じる相手として、若者を取り上げる。若者の意識調査を試みることで、若者の思いや考え方を探る。高齢者の社会参加活動は、新たな仲間づくりや地域づくりが必要であり、それが生きがいを高める手だてになると考えるからである。

## II 若者の意識調査の方法と内容

### 1. 調査方法

大学生を中心とした若者を対象に、2002年6月から7月にかけて、留置法による質問紙調査を実施した。786名からの回答のうち、有効回答数765（男性324名、女性441名）が得ら

れ、それをデータとして使用した。対象の年齢構成は、16歳以上20歳未満63.1%、21歳以上22歳未満23.1%、23歳以上13.8%である。

### 2. 調査内容

内容は、若者の生活状況、高齢者への思い、ボランティア活動などの側面から意識調査をした。若者の生活状況を通して高齢者に対する思いや考え方、さらには高齢者と一緒にしたこと、したいこと、期待することなどを探り、高齢者との交流を深めお互いに支援できることを見出す。それが世代間交流の糸口になれば高齢者の生きがいづくりへの方策となる。

#### (1) 若者の生活環境にかかわる設問項目

若者の生活状況としては、家族構成、関心事、得意な事などを中心に8項目を設問した。①年齢と性別 ②家族構成 ③地域への愛着 ④現在の関心事 ⑤得意な事 ⑥得意分野の指導する力 ⑦教えたい対象者及び⑧教えたくない理由などである。

#### (2) 若者からみた高齢者についての設問事項

同居の高齢者や身近な高齢者を思い浮かべながら、高齢者への関心や思い、あるいはモノづくりの様子などを設問した。①あなたの思う高齢者とは何歳か ②一般的に呼ぶ高齢者は何歳からか ③高齢者への関心はあるか ④高齢者に好意を持っているか ⑤高齢者とのふれあいはあるか ⑥高齢者にしてあげたこと ⑦高齢者から受けた手助けの有無 ⑧それはどこの人か ⑨手助けを受けた内容 ⑩あなたの思う高齢者の印象について ⑪あなたからみた高齢者の生活への印象 ⑫高齢者と一緒になりたいことに加え今後のふれあいに関する内容から、⑬これから受けたい指導内容 ⑭モノづく

\* 岐阜大学教育学部

りへの様子と思い ⑮高齢者に教えてもらいたいモノづくりの内容 ⑯高齢者と一緒にしたいモノづくりの内容など 16 項目である。

(3) ボランティア活動等の社会参加についての設問項目

若者のボランティア活動等に対する有無、そこでの高齢者とのふれあい、感想など 11 項目の設問をした。①社会参加の有無 ②活動への継続意志 ③活動内容 ④活動の対象者 ⑤活動での高齢者とのふれあいの有無 ⑥活動中の高齢者の参加の有無 ⑦高齢者と活動をした時の感想などに加え、ボランティア活動の経験のない人には、⑧今後の参加活動の意志 ⑨今後の参加活動の内容 ⑩今後の参加活動の対象者 ⑪社会参加活動をするための条件などである。

3. 分析方法

調査各項目について、単純集計を行い、必要に応じてクロス集計 (χ<sup>2</sup> 検定) を行った。

III 結果及び考察

1. 若者の生活環境とその実態

若者の生活状況からみた結果である。家族構成は祖父母との同居は少なく、祖父 20.9%・祖母 33.3%の家族構成である (図 1)。厚生白書<sup>2)</sup>によると、“この約 20 年間一貫して同居率は低下している”とある。しかし高齢者世帯が増加している背景には子どもとの同居を必ずしも望んでいる高齢者ばかりとはいえないことも考えなければならない。地域への愛着は「愛着がある」(男性 51.2%・女性 58.7%)、「少しある」(男性 39.2%・女性 33.1%)を合わせると、ほぼ 9 割以上の若者が地域への愛着を持っている。男女比では、わずかながら男性よりも女性の方が上回っていた (図 2)。「地域への愛着」と「高齢者への関心」での関わりは、有意差がみられたことから、地域の愛着とともに高齢者にも関心が高いことがうかがえた (表 1)。

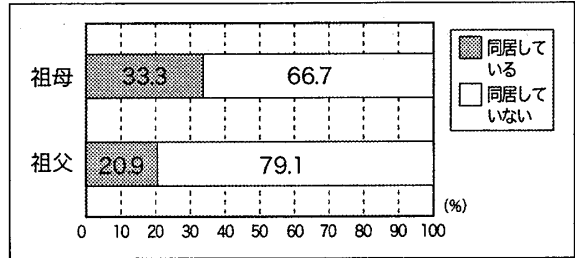


図 1 同居の高齢者

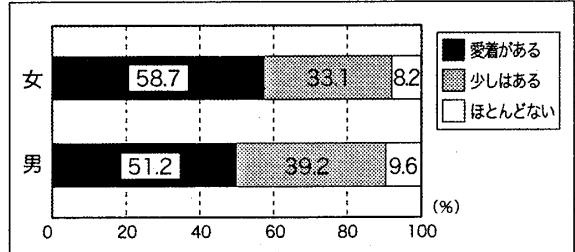


図 2 地域への愛着

表 1 高齢者への関心と地域への愛着との関わり

関心について	地域への愛着			計
	愛着ある	少しある	ほとんどない	
高齢者に関心がある	175	91	17	283
高齢者に関心がない	93	92	28	213
わからない	157	90	22	269
計	425	273	67	765

P 値 0.0006 判定\*\*

若者の関心事を設問したところ、「ファッション」、「友人・異性」、「趣味的なこと」が上位を占めた (図 3)。男女比では、男性は「スポーツ」(11.1%)、「友人・異性」(10.8%)、「趣味的なこと」(9.8%)、女性は「ファッション」(11.8%)、「友人・異性」(9.7%)、「旅行・レジャー」(9.6%)への関心が高かったことから、若者の関心は、やはり「ファッション」、「友人・異性」への興味が強く、今の若者の気持ちを反映している。若者の関心事がわかったところで、得意なことも設問してみた。「スポーツ」、「音楽」、「ケーキ・菓子作り」が上位を占めた。男女比では、男性は、「スポーツ」(31.5%)、「音楽」(13.9%)、「読書」(10.5%)、「パソコン・インターネット」、「釣り」の順であり、女性は「音楽」(16.2%)、「読書」(14.1%)、「ケーキ・菓子作り」(12.4%)、「料理」、「スポーツ」の順であった (図 4)。男性の 1 位はスポーツ、女性の 1 位は音楽という結果になった。

これらから若者は、地域への愛着が強く、高齢者との交流も図れることがわかった。本報の若者のライフスタイルと前報<sup>3)</sup>の高齢者のライフスタイルから異世代間の共通点を見出しお互いが助け合える環境づくりを目指したい。若者は、高齢者とふれあうことで高齢者の立場への理解、高齢者の弱い部分、自分との違い、あるいは高齢者の思慮深さ、寛容さ、忍耐力、そして社会人であった頃の経験や知識、能力などを理屈ではなく心から理解ができるようになると思われる。また、高齢者は若者とふれあうことで、長年の職業生活において培ってきた知識、技能、経験を生かした能力の活躍の場になるよう交流を深め役立てていきたい。これらの相互交流を通して、若者は高齢者を、高齢者は若者を理解することができれば、世代を超えた交流が多くを学びあう場ともなる。若者から高齢者に支援できること、高齢者から若者に伝えられることを考え活用したい。それには、若者の関心事に

高齢者の得意な分野をどう絡ませるかが重要な課題となる。つまり、お互いのライフスタイルに共通点を見出すことが肝要であろう。確かに近年、祖父母との同居が減少してきている上に、近所でも高齢者とのふれあいや交流が少なくなってきたと叫ばれている。高齢者の体験談、伝統芸能の指導・伝授、あるいは社会や人生へのアドバイスなどを受ける機会も減ってきている。その反面、若者も人間関係の悩みやストレスを抱えているのではないだろうか、そうした悩みやストレスは交流によって相互理解が一層得られる。

## 2. 若者からみた高齢者への思い

若者の高齢者への思いを探ることで若者の高齢者に対する思いや考え方を明らかにする。若者は高齢者への年齢をどう捉えているか、高齢者の暦年齢を尋ねてみた。「一般的に何歳ぐらいを高齢者と呼ぶか」との設問では、「65歳以上」と思っている若者が52.8%あった。こ

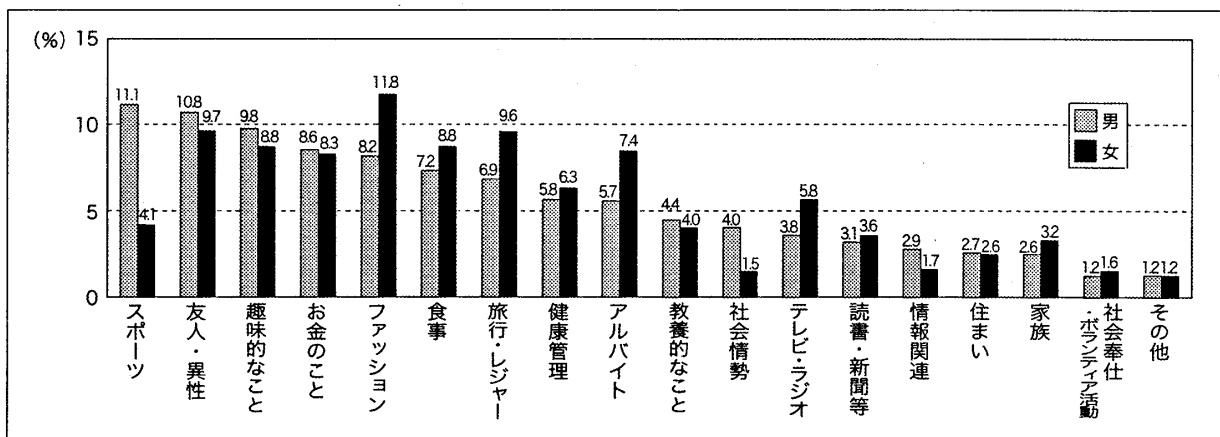


図3 現在の関心事

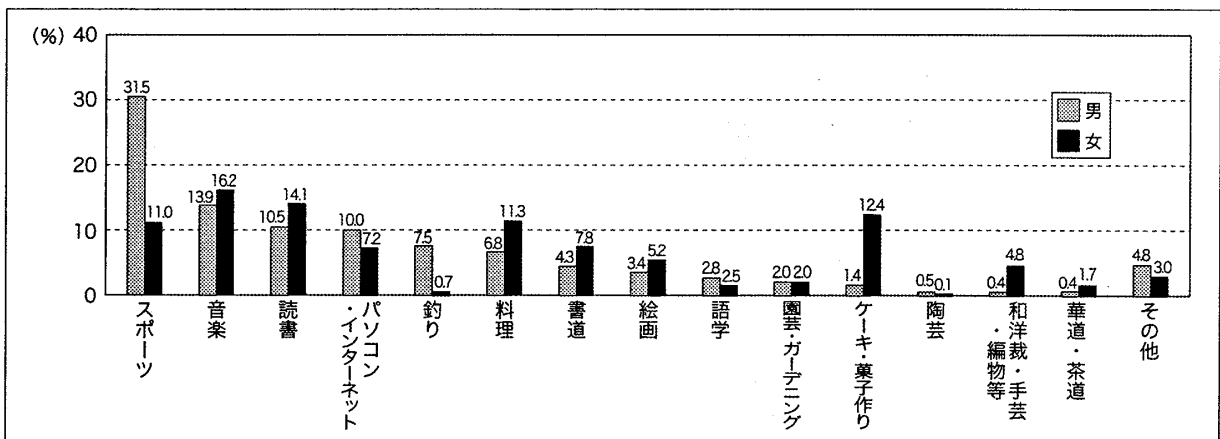


図4 若者の得意なこと

れに対し、「あなたが思う高齢者の年齢は何歳か」との設問では、「65歳以上」36.9%、「60歳以上」34.0%、「70歳以上」24.3%の順であった。高齢者の年齢を「60歳以上」と思っている若者が約3割いた。高齢者の年齢を意外と高くみていたことがわかった(図5)。むしろ高齢者の年齢を的確に感じ取ることは難しいが、元気で活動的な高齢者が多いなか高齢者に対する年齢の認識は低かった。

では、若者は高齢者の生活をどう受け止めているだろうか。「少し寂しそう」26.7%、「少し楽しそう」25.2%というように、強烈な印象はないようだ(図6)。

高齢者に対しての若者の関心度を尋ねてみた。「高齢者に関心がある」37.0%、「関心がない」27.8%、「わからない」35.2%の順であり、関心のある若者は関心のない若者より高かった。また、高齢者への好意は、「好意をもっている」39.9%、「持っていない」14.8%、「わからない」45.4%の順であり、好意を持っている若者は、持っていない若者よりも高いものの「わからない」の回答からは自分自身の気持ちをはかりかねていることが伺えた(図7)。それでも高齢者とのふれあいの設問では「ふれあいがある」(男19.1%・女23.8%)、「時々ある」(男35.8%・女39.0%)との回答からふれあいはまずまずであった(図8)。今後の世代を超えた交流へ期待がかかる。

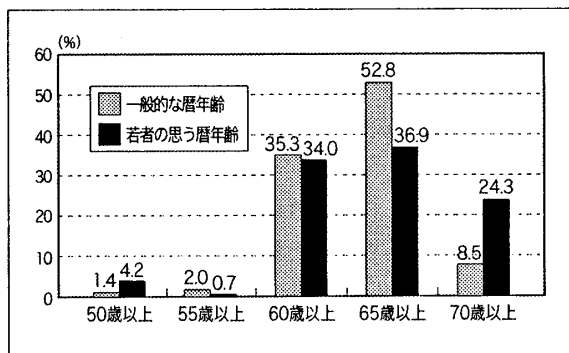


図5 高齢者の暦年齢

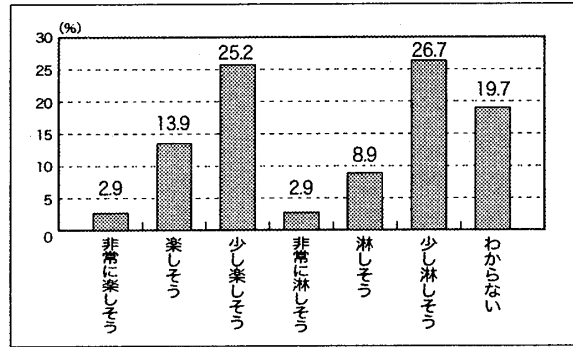


図6 高齢者への印象

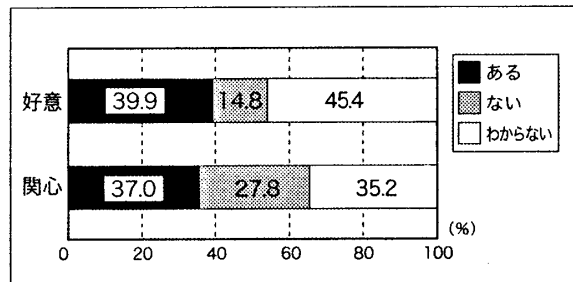


図7 高齢者に対する関心・好意

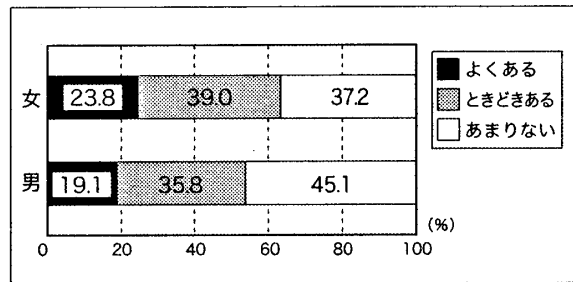


図8 日常生活での高齢者とのふれあい

次に、若者と高齢者の交流内容を明らかにするための設問を試みた。若者がいつ、どこで、どんな方法で高齢者と接する機会があるのかを具体的に尋ねた。若者が高齢者に手助けをした内容では、男性は「席をゆずる」(36.9%)、「話し相手」(24.6%)、「荷物を持つ」(15.4%)、「送迎をする」(6.2%)の順であり、女性は「話し相手」(28%)、「席をゆずる」(25.6%)、「荷物を持つ」(12.8%)、「家事援助」(9.1%)の順であった(図9)。このことから、高齢者の手助けというよりはむしろみるにみかねてといった内容が多かった。だが、「話し相手」は、特定の者が相手であろうから、教育現場での福祉ボランティア活動や施設訪問を通しての交流等、政策的に誘導された結果と予想される。つまり、「話し相手」は意図的ではあっても自発的ではないと考え

られる。

そこで、高齢者から手助けを受けた若者の比率は、「ある」56.6%と、過半数を占めた(図10)。「ある」と答えた若者から、手助けの内容を尋ねてみた。「生活の知恵」(40.0%)、「しつけや礼儀」(34.2%)、「人生経験」(24.1%)、「社会での知識・常識」(19.2%)、「趣味・教養」(17.6%)、「特技・技術」(14.6%)の順であった(図11)。高齢者の手助けは、高齢者の考え方や思いにふれるきっかけにもなる。そして、身近な高齢者からは人生の達人としての多くを学ぶことができる。しかも高齢者自身もそれらを教えたい、伝えたいと思っていることは前報<sup>3)</sup>でも述べた通りである。高齢者の人生経験、仕事から培った知識や技能、社会でのマナー・常識、人との付き合い方など、さまざまな指導や手助けを受けることができる。

得難い手助けを受けた若者からは高齢者を頼りにしていることが感じられる。その若者の思いが高齢者の「力」を発揮させるとともに高齢者の自己実現の場にもなる。高齢者の手助けは交流を促すきっかけでもあり、世代間の架け橋にもなる。また、「高齢者の好意」と「高齢者から受けた指導や手助け」との関わりからも有意差がみられたことから、若者は指導や手助けを高齢者からの好意と受け止めていたことも明らかになった(表2)。

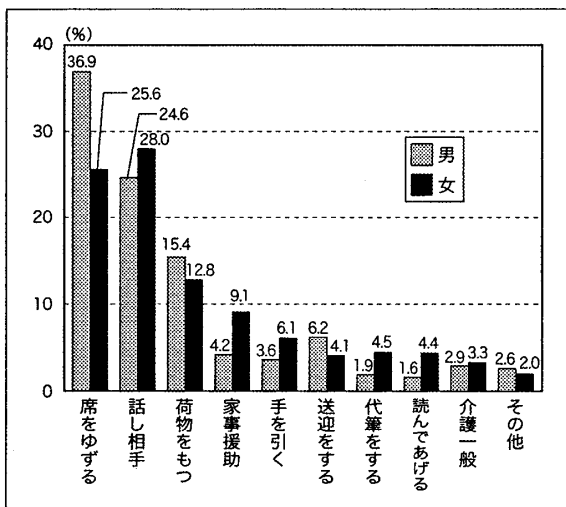


図9 若者が高齢者にしてあげたこと

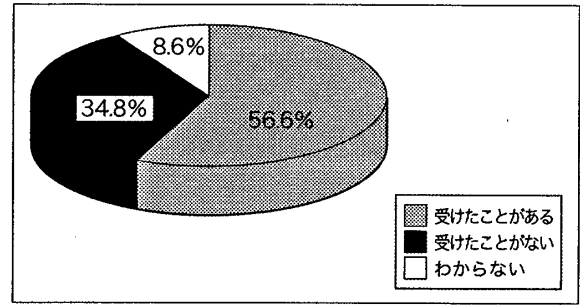


図10 高齢者から受けた指導や手助け

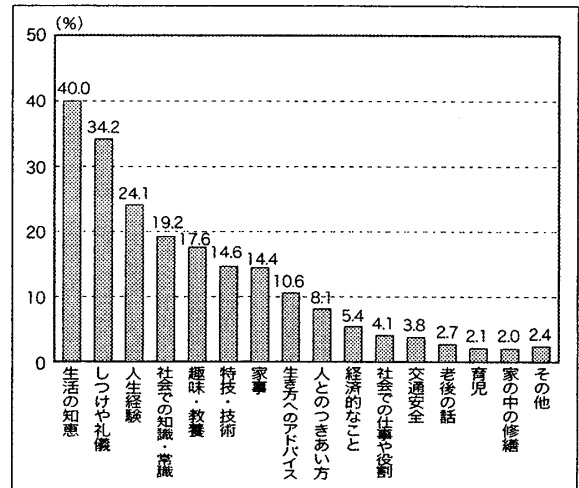


図11 高齢者から指導や手助けを受けた内容

表2 高齢者の好意と高齢者から受けた指導や手助けとの関わり

好意について	高齢者から受けた手助け			計
	ある	ない	わからない	
持っている	221	71	13	305
持っていない	43	60	10	113
わからない	169	135	43	347
計	433	266	66	765

P値 0.0000 判定\*\*

その手助けを受けた人はどこの高齢者かを尋ねてみた。「同居の人」(27.8%)、「親戚の人」(27.2%)、「近所の人」(12.7%)、「町内会の人」(6.3%)という順で、身内の高齢者の手助けが多かった(図12)。「地域への愛着」と「高齢者から受けた指導や手助け」との関わりにも有意差がみられた(表3)。

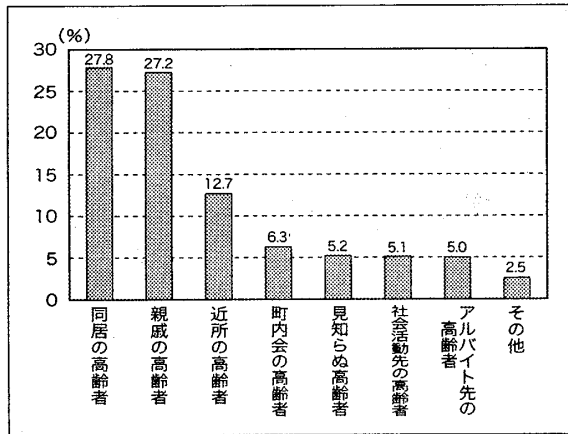


図 12 指導を受けた高齢者

表 3 地域への愛着と高齢者から受けた指導や手助けとの関わり

地域の愛着	高齢者から受けた手助け			総計
	ある	ない	わからない	
ある	258	127	40	425
少しはある	146	110	17	273
ほとんどない	29	29	9	67
計	433	266	66	765

P 値 0.0059 判定\* \*

では、高齢者の手助けを受けた経験がない若者に対して、高齢者の印象について尋ねてみた。「物知り」(15.3%)、「話し好き」(14.1%)、「頑固」(13.1%)、「気むずかしい」(11.5%)、「健康を気遣う」(9.9%)、「知識・教養」(9.8%)、「親切・やさしい」(8.8%)、「のろい」(8.8%)、「弱々しい」(8.4%)の順であった(図 13)。このことから「物知り」、「健康を気遣う」以外は、「頑固」、「気むずかしい」、「親切・やさしい」、「のろい」など性格上の印象が強くてた。

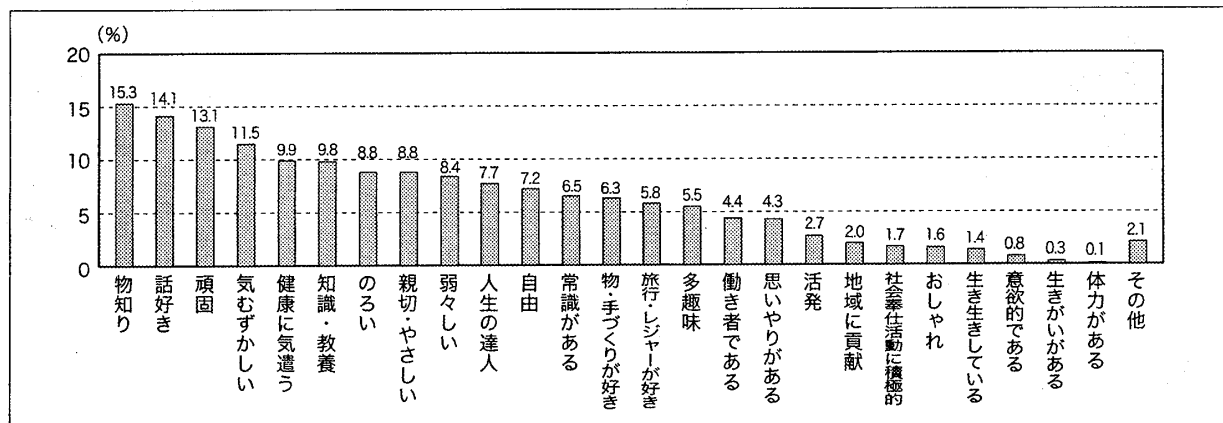


図 13 高齢者の印象 (手助けを受けたことのない若者)

つまり、手助けを受けなかった若者の印象は、教養はあるが話し好きで、頑固で、気むずかしいとの印象であった。

そこで若者が高齢者との交流を深めるきっかけとして、若者が高齢者と一緒に「したいこと」、「できること」を中心に若者の思いや考え方を探る。若者が高齢者と一緒にしたいことは、「趣味的なもの」(男 32.0%・女 23.6%)、「農作物づくり」(男 13.8%・女 15.7%)、「料理」(男 2.9%・女 17.3%)、「行事・祭り」(男 9.7%・女 8.8%)の順で上位を占めた(図 14)。「高齢者と一緒にしたいこと」と「高齢者への関心」の関わりにも有意差がみられた(表 4)。高齢者は「趣味的なもの」、「園芸・ガーデニング」、「地域の伝統的な行事や祭り」、「農作物づくり」、「料理」などに対して得意な分野が多くあることから、若者が高齢者と一緒に活動することには大いに期待が持てる。しかも、これらは高齢者の得意な分野であり、高齢者の「力」を活用することもできる。

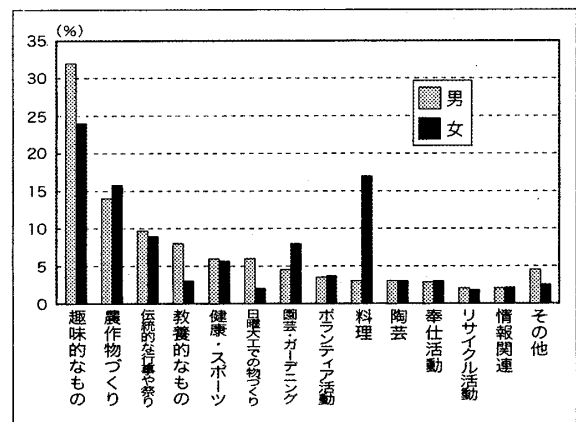


図 14 高齢者と一緒にしたいこと

表4 高齢者と一緒にする内容と高齢者への関心との関わり

一緒にする内容	高齢者に関心の有無
趣味的なもの	**
教養的なもの	**
奉仕活動	*
園芸・ガーディニング	**
ボランティア活動	**
リサイクル活動	—
情報関連	—
地域の伝統的な行事や祭り	**
農作物づくり	**
料理	**
日曜大工	—
陶芸	**
健康・スポーツ	**
その他	**

そこで、今後の若者の気持ちを探るために若者がこれまでに受けた手助けと今後の受けた手助けを比較すると「生活の知恵」60.0%が圧倒的に多く特徴が出た。続いて「人生経験」、「しつけや礼儀」、「社会での知識・常識」、「特技・技術」の順で社会や日常生活に対して若者の不安が感じとれる結果になった。内訳は男性は社会に役立つ内容が多く、女性は家庭的な内容にその傾向がみられたことから、若者への今後の手助けの内容が明らかになった(図15)。

### 3. 若者の社会参加(ボランティア活動等)の現状と今後のあり方

若者のボランティア活動等の状況や内容、あるいは高齢者との関わりを中心に設問を試みた。若者の社会参加の活動経験は、「経験がある」(男45.4%・女62.8%)、「経験がない」(男50.9%・女33.1%)の回答から過半数が「経験がある」を占めた(図16)。また、「男女比」と「社会参加経験」の関わりでは、女性の方が男性よりも関わりが強く有意差がみられたことから、若い女性の活動参加に高い意欲がみられた(表5)。社会参加経験者にその活動内容を尋ねてみたところ、「美化活動」(19.9%)、「話し相手」(19.6%)、「献血」(17.5%)、「資源リサイクル」(12.2%)、「身の回りの介助」(11.2%)、「スポーツ・レクリエーション」(10.8%)の順に上位を占めた(図17)。そしてその活動の対象者は、「老年」(23.3%)、「施設入居者」(22.0%)、「小学生」(17.8%)、「中・高・大生」(13.7%)、「乳幼児」(9.8%)の順であった(図18)。

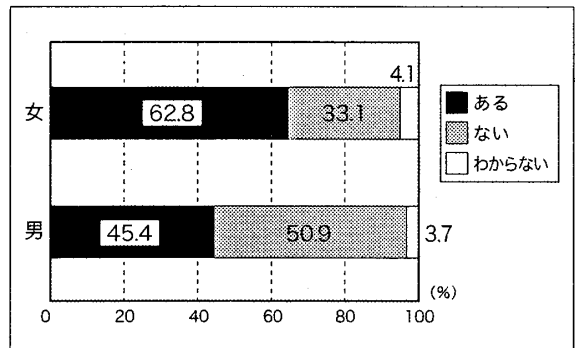


図16 若者の社会参加の経験

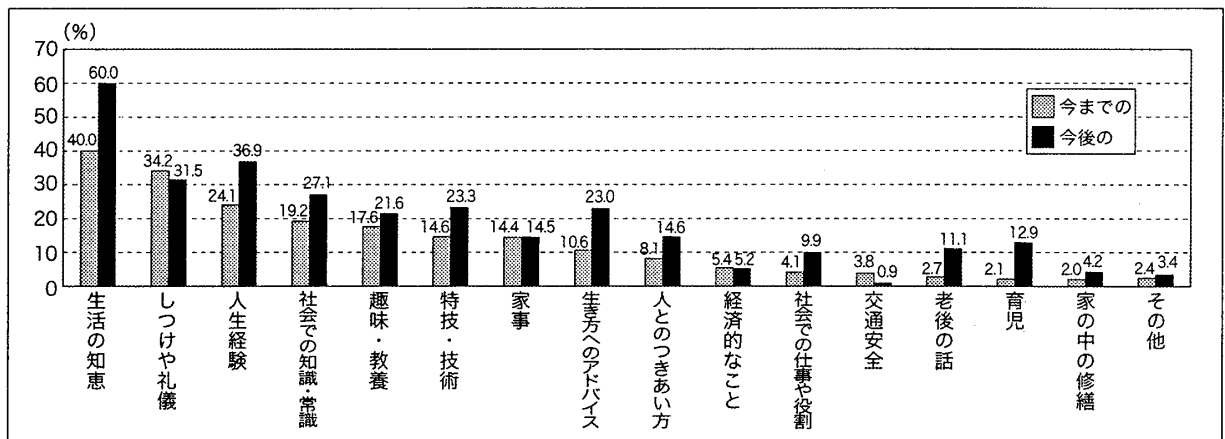


図15 今までに受けた手助けと今後受けた手助けの内容

表5 男女比と社会参加経験の関わり

男 女 比	社会参加経験の有無			総計
	ある	ない	わからない	
男	147	165	12	324
女	277	146	18	441
計	424	311	30	765

P 値 0.0000 判定\*\*

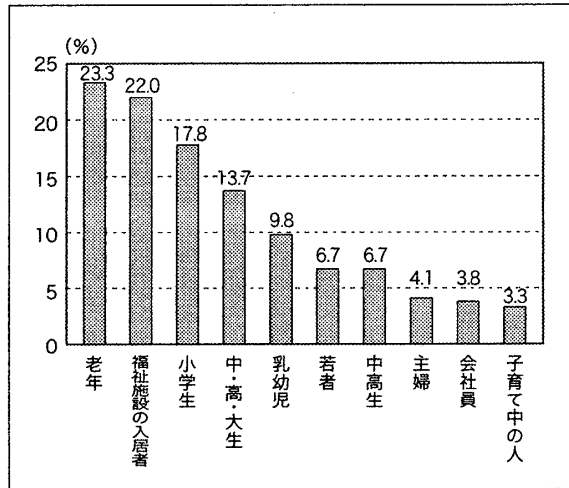


図 18 若者の社会活動の対象者

これらから老年層を対象に活動をしている若者は、「老年」や「施設入居者」に対して「話し相手」、「身の回りの介助」、「レクリエーション」を主に行なっていることがわかった。一方、若年層を対象に活動をしていた若者は、「美化活動」、「資源リサイクル」、「スポーツ」などを通して「小学生」、「中・高・大生」、「乳

幼児」を中心に活動を行なっていたことがわかった。さらに、「今後も社会参加をするか」との活動意志の設問では、「今も続けている」(8.8%)、「また参加したい」(78.9%)、「もう参加したくない」(12.3%)との結果であり、「経験がある」の55.4%に比べ「今も続けている」の8.8%はあまりにも低い結果となったが、「また参加したい」との意欲に今後を期待したい。「社会参加経験」と「今後の参加意志」との関わりでも有意差がみられた(表6)。

次に、社会参加の経験があるという若者から、高齢者がその活動に加わっているか否かの設問をしてみた。「高齢者は多かった」(8.9%)、「高齢者は少なかった」(13.3%)、「高齢者はいなかった」(23.5%)、「わからない」(8.5%)の順で、若者の活動領域では高齢者の参加は極めて少ないことがわかった。ただし、「高齢者への関心」と「社会参加経験」との関わり(表7)や「高齢者への関心」と「社会参加での高齢者とのふれあい」の関わりでは有意差がみられた(表8)。このことから社会参加活動の交流の輪が広がる可能性が高く、世代を超えた活動を示唆する。しかも、高齢者と一緒に活動をした若者からの感想では、「いい経験になった」(21.0%)、「楽しかった」(11.1%)、「明るい雰囲気であった」(9.4%)、「教えてもらうことが多かった」(8.5%)、など高齢者に対しては好印象であった(図19)。

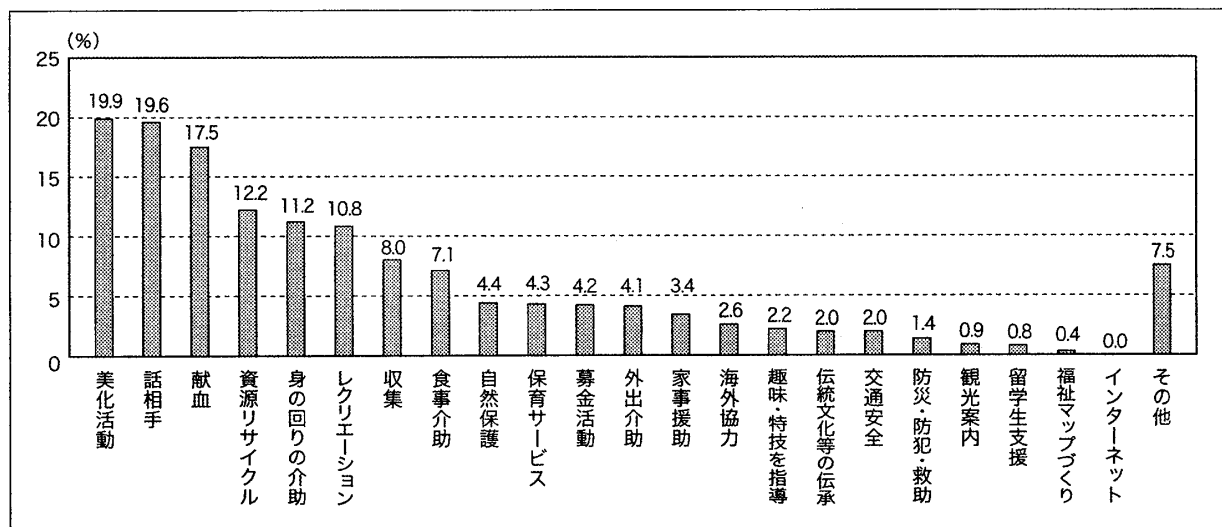


図 17 若者の社会参加活動の内容



表6 社会参加経験と今後の参加意志との関わり

社会参加の経験	今後の参加経験の意向				計
	今も続けている	また参加する	もう参加しない	無回答	
ある	35	313	49	27	424
ない	0	2	0	309	311
わからない	0	0	0	30	30
計	35	315	49	366	765

P値 0.0000 判定\*\*

表7 高齢者への関心と社会参加経験との関わり

関心について	社会参加経験の有無			計
	ある	ない	わからない	
関心がある	176	100	7	283
関心がない	97	110	6	213
わからない	151	101	17	269
計	424	311	30	765

P値 0.0003 判定\*\*

表8 高齢者への関心と社会参加での高齢者とのふれあいの関わり

関心について	活動での高齢者とのふれあい			計
	ある	ない	わからない	
高齢者に関心がある	110	45	17	172
高齢者に関心がない	45	45	7	97
わからない	61	48	40	149
計	216	138	64	418

P値 0.0000 判定\*\*

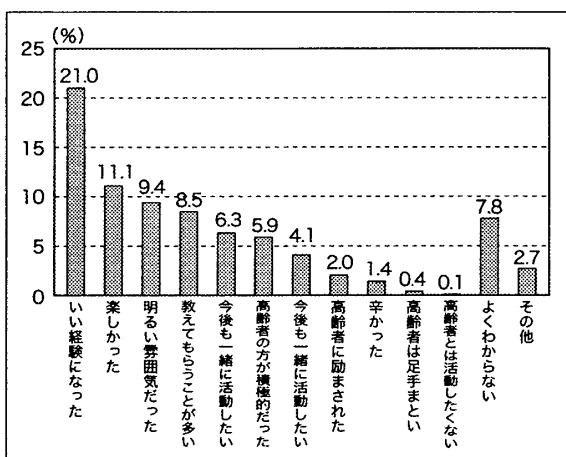


図19 高齢者と一緒に活動した内容

続いて、社会参加活動の経験がなかった若者に、今後の参加を尋ねてみた。「参加意志がある」(28.3%)、「意志がない」(29.9%)、「わからない」(40.2%)というように、参加意志に対してわからないとの回答が高く活動

への意志表示ははっきりしていなかった(図20)。そして、今後の社会活動に参加する内容からは、「献血」(16.6%)、「話し相手」(10.2%)、「自然保護」(9.2%)、「スポーツ・レクリエーション」(7.1%)、「趣味・特技を指導」(6.1%)が上位を占めていたことから、高齢者との関わりが少なかった(図21)。しかし、「活動内容」と「今後の参加意向」との関わりには有意差がみられたことから、今後の参加内容の関わりとしても好ましい結果となった。(表9) このことから若者は自分の関心事だけに留まらず、豊富な内容を活動領域にしたいとの意識が感じとれた。「活動内容」と「高齢者のふれあい」の関わりにも有意差がみられた(表10)。

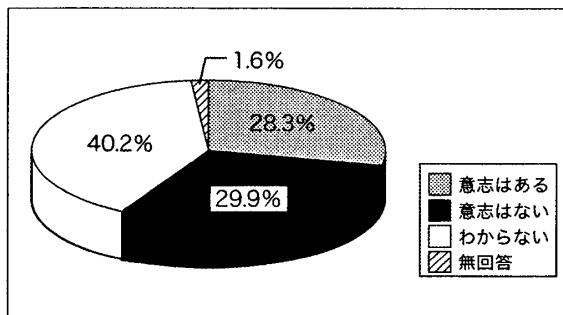


図20 未経験者による今後の社会活動の参加意志

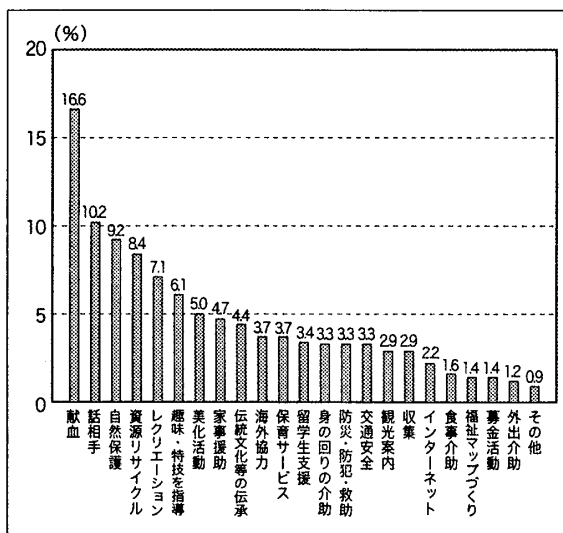


図21 今後社会生活に参加したい内容

表9 活動内容と今後の参加意向との関わり

参加内容	今後の参加意志
献血	**
家事援助	**
身の回りの介助	**
外出介助	**
食事介助	**
話相手	**
趣味・特技を指導	**
福祉マップづくり	**
美化活動	**
伝統文化等の伝承	**
観光案内	—
スポーツ・レクリエーション	**
自然保護	**
資源リサイクル	**
防災・防犯・救助	**
交通安全	**
海外協力	**
留学生支援	*
保育サービス	**
収集	**
募集活動	**
インターネット	—
その他	**

表10 活動内容と高齢者とのふれあいの関係

参加活動内容	高齢者とのふれあい
献血	**
家事援助	**
身の回りの介助	**
外出介助	**
食事介助	**
話相手	**
趣味・特技を指導	**
福祉マップづくり	—
美化活動	**
伝統文化等の伝承	**
観光案内	*
スポーツ・レクリエーション	**
自然保護	**
資源リサイクル	**
防災・防犯・救助	**
交通安全	**
海外協力	**
留学生支援	—
保育サービス	**
収集	**
募集活動	**
インターネット	—
その他	**

若者の社会活動対象者の比較から今までの対象者は「老年」、「福祉施設入居者」、「小学生」、「中高大生」であったが、今後の対象者には、「老年」(20.0%)、「小学生」(14.5%)、「乳幼児」(12.5%)、「施設入居者の高齢者」(10.1%)の順で変化がみられた。高齢者との関わりの少ないものを活動内容として選んでいた若者であったが、対象者では「老年」をトップに選んでいたことが印象的だった(図22)。クロス集計の結果からも有意差がみられた(表11)。

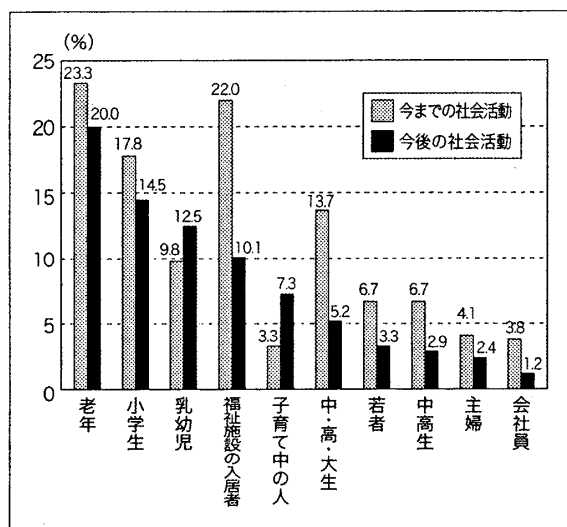


図22 若者の社会活動対象者の比較

表11 今後の活動対象者と参加予定との関わり

参加活動の対象者	今後の活動予定
乳幼児	**
小学生	**
中・高・大生	**
若者	**
中高年	**
老年	**
主婦	**
子育て中の人	**
会社員	**
施設入居者	**

社会参加活動の経験がなかった若者に今後の活動ができるようにするには、「時間があれば」(28.6%)、「きっかけがつかめれば」(16.6%)、「自分にできることがあれば」(14.6%)、「一緒に参加する人があれば」(11.4%)など

の条件が満たされれば活動ができると考えていることがわかった(図23)。「参加条件」と「今後の参加予定」との関わりにも強く有意差がみられた(表12)ことから、若者の参加条件の理由が今後の活動参加に大きくかかわっていくことがわかった。従って、若者の参加条件を満たす方策が必要であり今後の課題となった。

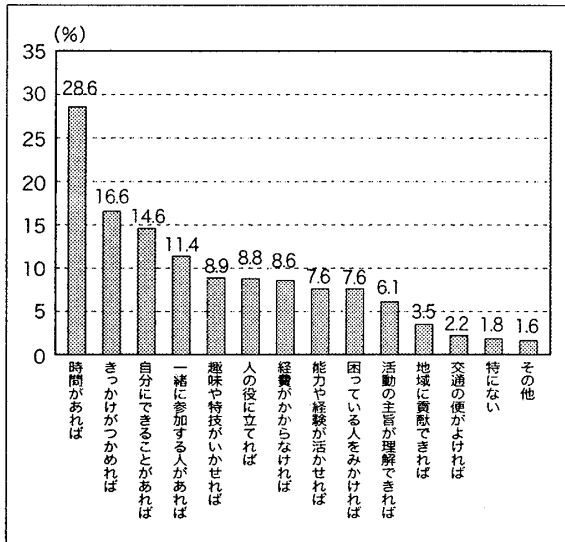


図23 今後の社会活動の参加条件

表12 今後の参加条件と今後の参加予定との関わり

参加条件の内容	今後の参加条件
時間があれば	**
趣味や特技が活かせれば	**
人の役にたてば	**
経費がかからなければ	**
主旨が理解できれば	**
自分にできることがあれば	**
地域に貢献できれば	**
きっかけがつかめれば	**
能力や経験が活かせれば	**
困っている人を見かければ	**
交通の便がよければ	**
一緒に参加する人や仲間がいれば	**
特になし	**
その他	**

これらの結果から、若者のボランティア活動の領域は狭く、活動対象者には若年層が多かったことから、世代間交流における活動は望みにくかった。その一方ではこの調査を契機に、若者のボランティア精神が少しでも高

まってくればとの期待感もあった。行政においては、ボランティア活動を通して高齢者に接する機会を与えてはいるものの、その場限りになっていることも否めない。若者が社会参加しやすい環境づくりは、高齢者にとっても社会参加、社会貢献しやすい環境でもある。お互いの交流を高めるきっかけは、高齢者とのさまざまな関わりができる条件整備が必要である。世代間交流の始まりは、よりよい共生社会を目指す第一歩にもなる。

#### IV おわりに

高齢者の活動は、若者への手助けとして充分可能であり、若者も高齢者からの指導や手助けを求めていることが明らかになった。また、高齢者の日常生活では、「席をゆずってもらう」、「荷物を持ってもらう」、「話し相手になってもらう」など若者の支援があったことも明らかになった。高齢者と若者はお互いを支援しながら理解を深めることができる。

若者と高齢者の心を互いに理解しあうことはむずかしい。それは生きてきた社会や経済状況、価値観や生活習慣の違いなど、世代差が大きいからである。世代差は、ときには互いを否定しあったり、葛藤を生んだりもする。また、高齢者と一口にいっても、「介護が必要な高齢者」から「現役で活躍する高齢者」はもとより、「自分を高齢者だと思っていない元気な人」など多種多様である。若者は高齢者と交流することで穏やかに、心豊かになった経験があるはずである。世代を超えた交流は戸惑いやもどかしさを感じることもあるが、思わぬ発想に出会えることもある。若者が高齢者との交流の機会を増やし、多くのことを学ぶと共に若者なりに高齢者に伝えられること、支援できることがあることも実感して欲しい。そして、身近にいる高齢者とふれあうことで、自分達の高齢期をどのように過ごしていくかを考えるチャンスでもあると受け取って欲しい。身近にいる高齢者を思い浮かべると、歳を重ねるなかで得られる思慮深さ、寛容さ、忍耐力、そしてさまざまな知恵や技能を生かし

て活躍する高齢者が多くいることに気づかされる。若者は、いや私達はその力によって助けられている。その一方で高齢者が社会の変化に対応できずにいることも知らされる。そして対応しながらも絶えず新しい情報を求めていることも知らねばならない。高齢者は若者との交流を深めながら社会連帯や相互扶助の意識を醸成する。社会参加活動は、地域の文化活動の振興や伝統文化の保存にも力を注ぐと共に地域社会への貢献をも可能にする。このように若者の高齢者への思いや考えを知り得たことは貴重な体験であった。

そこで次報は、高齢者と若者の交流を促す方策として“指導・伝授”に焦点をあてる。高齢者の生きがいの充足に若者の存在が役に立ち豊かな社会への貢献を促すことになるだろう。

#### 引用・参考文献

- 1) 高間由美子・杉原利治：東海女子短期大学紀要 第 30 号 2004 年
- 2) 厚生労働白書：厚生労働省 平成 15 年度版
- 3) 高間由美子・杉原利治：東海女子短期大学紀要 第 29 号 2003 年
- 4) 高齢社会白書：総務庁編 平成 12 年度版
- 5) 国民生活白書：経済企画庁 平成 12 年度版
- 6) 熟年・シニアの暮らしと生活意識データ集 2001：株食品情報センター 研恒社
- 7) 生活者意識データ集 2001：編集・発行ライフデザイン研究所 2001 年 3 月
- 8) 小林 司：「生きがい」とは何か 日本放送出版協会 1992 年 6 月
- 9) 金子 勇：高齢社会とあなた 日本放送出版協会 1998 年 9 月
- 10) 神谷美恵子：「生きがい」1980 年 みすず書房
- 11) 日本老年行動科学会：高齢者の「こころ」事典 2000 年 3 月 10 日